

2020年4月24日

大印(株)倉敷大果 [地方青果大卸]

[いいね!](#) [シェア](#) [Tweet](#)

岡山県倉敷市西中新田525-2

■自社の土地売却益で債務の一切を清算へ

民設民営の『倉敷地方卸売市場』の青果大卸、大印(株)倉敷大果（だいじるし・くらしきだいか、1968年7月設立、資本金7000万円、花田紘司社長）は今月末をもって営業を終了し解散に向けて残務整理に入る。同社の経営幹部は「債権債務は一切残さずに撤退できる。当初は本年9月頃を予定していたが、昨年からの相場の低迷が今年に入っても続いているうえ、今般のコロナ禍もあり、4月末に早めた」と説明している。

大果の業況に関してはこれまで本紙で何度か取り上げてきた。2000年2月期に40億円余あった年商は長らく漸減基調へ。「決済遅延」「系統機関の出荷停止」といった情報が散発するなか、経営立て直しのため14年3月にグループ再編を断行した。子会社の業務用食品卸、大果商事(株)（倉敷市）を本体へ統合。大果・水島支店（同市）でのカット野菜製造や量販向けの小分け事業は、花田社長の子息、花田将司氏が運営する、はなまる青果(株)（同市）へ譲渡した。伴い、大果本体の年商は14年期21億円⇒15年期14億円へ急縮。だが、「この改革での事業の取捨選択が甘く、さらに調子を落とした」（市場筋）と回顧する向きも。再編以降も売り上げは下げ止まらず、19年期は10億円まで低迷。利益面もここ数期、百万円単位の欠損を散発している。「もともと借り入れ体質でありながら、利益が確保しづらい状況でも役員報酬の高さが目立った」（同筋）。

今回の事業撤退の背景について、経営幹部は次のように説明する。「建物は築50年以上が経過し老朽化。来春、食品衛生法の厳格化が控えており、学校や医療給食、量販店など納品先が求める衛生基準を満たしにくくなっている。仲卸店舗を含めて建て替えが必要な時期が迫るが、それには億単位の投資が必要。有力市場が大型化していくなかで、当社の経営環境はさらに厳しくなると判断した。いまなら迷惑を掛けない形で廃業できる。金融機関も当社の手仕舞いに理解を示しており協力してくれている」。

近年、売り上げが減少するなか、借入比率が相対的にアップ。「金融債務がM&Aのネックになっている」「追加融資が受けにくい」（各市場筋）などとも指摘されていたが、幹部の説明にもあるように、今回、借入金や買掛金、過去の滞留金など一連の債務をすべて清算できるという。それは市役所の至近という好立地にある大果の土地が自前で、市の外郭団体への売却が決定したからだ。

なお、上述のはなまる青果は「大果との間に資本関係はない。いまでは取引先の1社であり大果の廃業とは無関係」（経営幹部）とのこと。また、大果の撤退に伴い、同社へ出荷していた生産者は場内の同業大卸、(株)丸倉青果（同市、小河原金平社長）が引き継ぎを約束している。大果が所有する仲卸店舗では2社がテナントとして営業中だが、「9月末までに退去するよう伝えている」。

移転先や事業継続の判断については確認していない」(同幹部)。
〔担当記者直通電話092-781-9573〕

いいね! シェア Tweet

この記事に関する情報をお寄せください

2020年4月24日
大卸、曲げ高橋水産の今決算
と業界の見方(下)

2020年4月24日
<長州観光開発(山口)事件>
秋、山口の地...

Copyright 2020 Syokuhinsokuho Co., Ltd.